

受験番号	
氏名	

トヨタ看護専門学校

2024年度【公募・自己】推薦入学試験問題（小論文）全一頁中一頁

次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えよ。

地方の高齢者施設にいる身内が入院したと連絡がきたのは三月初旬のことだった。心の準備をして駆けつけたが、幸い、意識も戻り話もできるほどになっていた。それでももう口から物を食べることもできず、看取りの時期なのだという。とはいえ、夏の暑さが訪れた今もまだ「最期の時間」は続いている。

何の役に立つわけでもないけれど、わずかな時間でも気が紛れるならと、ときどき面会に通っている。バスを降りて高台にある窓を見上げると、カーテンが呼吸するように小さく揺れている日もあれば、熟睡しているかのように固く閉ざされている日もある。寝たきりの人は、声をかけても何も反応しないこともある。目覚めても、じつと天井を見つめたり、うつらうつらしたりする中で、不意にそばにいる者のことを思い出し、気を遣うように話し始めてくれる。そのお喋りは、回想だつたり、ふと浮かんだ用事のようだつたり、とりとめなく響くけれど、それもまたこちらの理屈であつて、本人の中にはなにかしらの物語があるのだろう。記憶と夢と妄想と現実とのあわいで紡がれる話に相槌をうちながら、理解できぬことにどう反応すべきかと戸惑う。しかし、そもそも理解などしなくていいのだ——そう気づくまで少し時間がかかった。今では、一時間ほどの面会の半分以上は黙つてそばに座つてているだけだ。その人は私の顔をじっと見ていることもある。抱いているぬいぐるみに視線を向けることもある。誰かを探しているかのようゆつくりと首を回すこともある。先日はその合間に、「あなたの母さんは心臓が弱かったの?」と問うてきた。「十代の頃から心臓が悪かつたみたい」と返すと、悲しそうな顔をして「私の心臓はずいぶんと強いんだね」とため息をついた。

一時間に三本しかないバスの時間がきて、じやあそろそろ帰るね、また来るね、また会おうねと声をかけると、瘦せた手をゆつくりと伸ばしてくれる。その手に触るとひんやりとしている。「手が冷たいね」と呟くと、「今日は少し寒いだろ」と言う。「そうか、少し寒いかもね」と答えるが、次のバスに乗ることにしてまた腰を下ろし、その手をしばらく温めてみる。面会を終えてバス通りへ出ると、外は暑い。バスを待ちながら、その人の窓を見上げる。いつも冷たい手は、今は布団の中にしまわれて、また眠りの世界へ戻るところだろうか。植物を育てるのが得意で、針仕事や絵手紙が好きで、いつもせつせと動いていた細い手を思う。

二十年以上も前に亡くなつた私の母は、長らく心臓を患つていた。発作が起きると苦しそうにもがくその背中を、私の手は何年もさすった。最後の発作から旅立つまでのひと月、泣きながらそばにいる私が、透明感のある蝶人形のような肌に変化したその手を握ると、偶然なのかどうかはわからないが、こちらの手を握り返そうとするようにかすかに指が曲がるのを感じた。看護師さんが「わかっているみたいよ」とやさしい言葉をくれた。母の体が消えたとき、私の手は、さする背中を、触れる指を求めてやまず、自分の右手を左手で握りしめて鎮めながら、別離の喪失感がこんなにも身体的で局所的なものだと知つたのだった。

親戚の面会に通い始めてから、そんな記憶が次々に蘇つてきた。母の手は美しく、きれいに伸ばした爪にいつもマニキュアを塗り、器用に手芸などをしていた。それに引き換え私は、いわゆる「手仕事」と呼ばれるものが苦手なうえに、いくつになつても子どものように小さな手をしている。それは幼い日に、公園の砂場で大好きな友だちと砂山をこしらえた手だ。

私には隣家に住む同い年の幼なじみがいて、いつも一緒だった。手をつなぎ、喧嘩をして手を放し、仲直りをし、指切りをした。私たちの家の近くにあつた公園は、今では、おもちゃのような小さな滑り台と低い鉄棒があるだけになつてしまつたが、当時は回転型のジャングルジムがあり、ときには紙芝居やポンポン菓子のおじさんがやってきて、楽しくにぎやかな空間だった。

砂場では、砂のおにぎりをこしらえたり、砂のプリンを作つたり、大きな砂山を作つたりした。砂山は、ほどよい湿気が砂に含まれていなければならないから、いつでも作れるわけではない。今日はいい山ができそだと子どもながらに判断した日は、二人でせつせと砂を盛り上げる。小さな子どもの手が砂を掬つて落とし、手のひらで叩いて固める。また掬う、落とす、叩く。「このくらいにする?」「このくらいにしようか」と決めて、山頂を形作ると大きな美しい円錐が現れる。そうしたら山を挟んで向かい合い、双方からトンネルを堀り始める。照りつける陽射しの下でも、トンネルの中はひんやりと心地よい。崩れぬよう用心しながら、小さな二つの手がゆつくりと少しずつ前へ進んでいく。肘まですっぽりとトンネルに隠れてしまう頃、砂の冷たさに慣れた私の手が不意に友だちの手と出会い。貫通だ! 砂のトンネルのなかで指をつないではしゃぎながら二人で笑うのだった。

私の手は、おそらく今もこのときのままだ。母の背をさすつていたのも、寝たきりの人の瘦せた手をいま温めているのも、あの日、友だちの指がくれた生の感覚を保ちつづけるこの小さな手なのだと気づく。パソコンを叩く手を止めて、ずっと好きになれずにいた自分の手をじっと見てみる、やさしくできることをみんなが教えてくれた手を。

(高柳聰子「手の記憶」『群像』2023年9月号による)

問一 傍線部「別離の喪失感がこんなにも身体的で局所的なものだと知つたのだった」とあるが、これはどういうことか。六〇字以内で具体的に説明せよ。(句読点も一字に数える)

問二 右の文章に対するあなたの意見・感想を、具体例をまじえて述べよ。(六百字以上八百字以内)(句読点も一字に数える)